

ふっと目が覚めた。

窓の外はまだ暗いが、時計の針は午前二時を指している。

喉の奥から漏れた声が掠れていた。夢を見た気がするが内容は
思い出せない。

ただ全身汗だくで気持ちが悪い。シャワーを浴びようと起き上
がろうとして、体に力が入らないことに気がついた。最近いつ
もこの調子だ。体が重いし頭が痛い。風邪かと思えば葉なども飲
んでいるが全く体調が戻る様子はなかった。

(明日も学校だし早く寝ないと)

そう思うものの眠気は全く来ない。軽くシャワーを浴び再び横
になるも一向に眠れず、結局朝方近くになってようやく眠りに
つくことができた。

「……どうしたの？ 顔色が悪いみたいだけど」

昼休み、昼食を終えた後教室に戻ったところで話しかけてきたのは学級委員長である七瀬君だった。彼とは隣の席で、グループワークなどで少し話す程度の間柄だった。隣にいる分私の不調に気づいたのだろう。そこまで私の顔色が悪かったのか。

「ううん、なんでもないの。ちよつと寝不足なだけ……」

心配をかけないように笑ってみせると、「それならいいけど……」と少し困ったような顔をして去って行った。

彼は真面目そうな見た目通り成績もよく、先生たちからの信頼も厚い優等生だった。クラスの中心にいるタイプではないけれ

ど、誰からも好かれていたと思う。実際彼の周りには常に人がいて楽しそうだ。私とは正反対の人種だと、ぼんやり思った。その日一日の授業が終わり放課後になった。私は部活には入っていないため帰宅するだけだ。鞆を持って立ち上がると視界がぐにやりと歪んだ。

(あれ……?)

平衡感覚を失いよろける。机に手をつくが、上手くバランスが取れずに倒れてしまった。そのまま意識を失うように目を瞑る。遠くの方で誰かの声が聞こえた気がしたが、私の耳には何も届いていなかった。

次に目覚めたとき、最初に感じたのは頭痛だった。頭を押さえながら体を起こすと、私はベッドで横になっていた。どうやら保健室で寝ていたようだ。だけどどうしてここにいるのか思い出せない。ゆっくりと辺りを見回すと、ベッドのすぐ横にある椅子に座っていた人物と目があつた。

「あ！起きた？」

「え……っ！？」

思わず大きな声が出る。そこに座っていたのは七瀬君だったからだ。

「大丈夫？気分悪くない？」

私が驚いたことに気づいたのだろう。七瀬君は優しい口調で言った。

確かに今は気分が悪くはない。ただまだ頭がぼうつとしているだけで、それにしても何故彼がこんなところにいるんだろうか。混乱しながらもとりあえず首を縦に振ると、ほっとした表情を見せたあと立ち上がった。そして体温計を差し出してくる。受け取って脇の下に挟むとすぐにピピツという音が鳴った。表示された数字を見て驚く。三十七度五分。平熱よりかなり高い。

「熱があるみたいだよ。無理しない方がいい」

言われてみれば身体が怠いし熱い気がする。今日はもう帰ろうかな……。

「迎えに来れる人はいる？」

そう尋ねられ首を振る。両親はちょうど出張が重なっており、二人とも家にはいなかった。だから今は家に一人だ。

すると七瀬君は一瞬何かを考える素振りを見せてから口を開いた。

「じゃあ、僕が送るよ」

「え？」

思いもしなかった提案に驚いてしまう。だってそんなこと申し訳なさすぎる。しかし七瀬君の真剣な眼差しに何も言えなかった。きっと本当に心配してくれているのだろう。黙っている私を肯定の意味だと思っただらしい。彼は満足そうに微笑んでみせた。その後すぐ教室から私の荷物を持ってきてくれて、二人で帰路についた。家に着くまで会話はほとんどなかった。隣同士並んで歩くなんて初めてのことだったし、沈黙でも気まずさを感じることはなかった。むしろ心地よいくらいだった。

家の前まで送ってくれた後も別れ際までずっと私のことを気にしていてくれて、それがとても嬉しかった。

それから七瀬君は学校でもよく話しかけてくれるようになった。授業中に分からないところを質問してきたり、廊下で会ったときに挨拶をしたり。最初は戸惑ったが徐々に慣れていった。ある日の昼休みのこと。食堂に行くために階段を下っていると後ろから名前を呼ばれた。振り返るとそこには七瀬君がいた。どうしたのか尋ねる前に彼は言葉を続けた。

「ねえ、今日の放課後時間ある？」

特に用事はなかったはずだと思いき首を傾げると、「よかったら一緒に帰らない？」と言われた。予想外の誘いに驚きつつも断

る理由などなく、了承する。すると彼はほっとしたような顔をして笑った。

その日の帰り道、私たちは色々な話をした。好きな本の話、音楽の話、家族構成、趣味、食べ物好き嫌い、学校の先生の愚痴……。今までほとんど話したこともなかったのに、不思議と話題は尽きることなく続いていった。まるで昔からの友達だったかのように趣味も合った。

「じゃあまた明日」

手を振り去っていく彼を見送った後、自分の部屋に戻る。なんだかふわふわしてる気がするのは多分熱のせいではないだろう。胸の奥がくすぐらわれているかのような不思議な気持ちになっただ。

次の日から自然と二人で帰るようになっていた。家までの道を歩きながらお互いのことを少しずつ知っていく日々はとても楽しくて幸せだった。いつの間にか彼と過ごす時間が待ち遠しくなっていた。

しかし楽しい時間というはあつという間に過ぎていく。話しているとおつという間に私の住むマンションに辿り着いてしまう。いつもこの瞬間は名残惜しく感じてしまう。「また明日ね」と手を振って立ち去ろうとすると、不意に腕を掴まれた。

「あのさ、紗理奈さんさえ良かったら……うちに来ない？」

七瀬君は緊張しているようだった。その顔は赤く染まっっていて、

こちらにまで移ってしまいそうだ。

「え、でも……」

迷惑じゃないかな。おずおずと言うと彼は慌てた様子で両手を左右に振った。

大丈夫だから、と何度も繰り返す彼に根負けして結局招かれることになった。

部屋に入ると意外と綺麗で驚いた。男の子の部屋はもつとごちやごちやしたものだと思像していたのだが、彼の性格が出ているのか家具なども最低限のものしか置いていないようだ。七瀬君はお茶を用意してくると言ってキッチンへ行ってしまった。一人残された私は落ち着かない気持ちでそわそわしてし

まっていた。今更ながら急に部屋に来てしまったことが恥ずかしくなる。やっぱり断れば良かったかもしれない。

落ち着かずにあたりを見渡していると、机の下に何かが落ちていることに気づいた。

「写真……?」

なんとなく気になり、手にとってみるとそれは私の写真であった。心臓が変に脈打つ。その写真は体育祭の時のもので、私が友達と一緒に笑顔で写っていた。なんだか見てはいけないものを見てしまった気がする。私は写真を元の状態に戻し、座り直した。

しばらくして七瀬君は戻ってきた。手にはマグカップを持って